

【論 文】

# ガンディーの「ヒンド・スワラージ」と日本 —ガンディーの近代文明批判と近現代日本—

林 明

## 目次

### はじめに

・東京大学・デリー大学でのイベント、国際共著本 ・東京大学・デリー大学でのイベント、  
国際共著本と筆者の関わり ・本論文の目的 ・本論文キーワード

### 1 「ヒンド・スワラージ」思想とは何か—近現代社会への異議申し立て、社会変革とアーシュラム—

・近代文明とは何か ・近代文明の産物としての弁護士、医者等への批判を通じた近現代社会  
の価値観への異議申し立て ・真の文明とは何か ・社会変革 ・アーシュラム ・非暴力  
・現代社会のインターネットによる誹謗中傷問題

### 2 日本のベル・エポックとガンディー— 1920 年代—

・ガンディーに関する著作の登場 ・新しき村

### 3 日本のカウンター・カルチャー運動とガンディー— 1980 年代—

・コミュン運動 ・非暴力トレーニング

### 4 東日本大震災後の日本人にとってのガンディー

・ガンディーからのメッセージ ・ナーラーヤン・デサーイからのメッセージ ・梅原猛から  
のメッセージ ・共働学舎

### おわりに

### 注

ガンディー思想（「ヒンド・スワラージ」思想を含む）及びガンディーと日本の関係に関する筆者  
が関わっている（インターネット上の）動画資料、英文論文、英字新聞記事

・筆者が作成した動画資料 ・筆者と Thomas Weber 先生との共著英文論文“Mahatma Gandhi:  
The Japanese Connection”の要約 ・筆者に関する英字新聞記事

### はじめに

ガンディー思想並びにガンディーの功績に対する国内外における関心は今日においてもいまだに  
高いものがある。

近年における国内外における関心の事例を挙げてみたい。

#### ・東京大学・デリー大学でのイベント、国際共著本

まず、日本人にとってガンディーから何を学べるかを考え、インド独立をガンディーと日本の日印交流の観点から振り返る国際式典が開催されたことが挙げられる。具体的には、①2019年10月19日に、東京大学でガンディー生誕150年記念式典@東大ホームカミングデイ150th Birth Anniversary of Mahatma Gandhi@UTokyo Homecoming Dayが開催されたことである。

次に、ガンディーが当時のイギリスに代表される近代文明を批判しインドの真の独立とは何かについて1909年に書いた『Hind Swaraj (ヒンド・スワラージ) (「インドの自治、独立」の意味)』(注1)に表わされている思想(=「ヒンド・スワラージ」思想)を基にオルターナティブな文明や社会を模索することを目的とした国際会議が開催されたことが挙げられる。具体的には、②2021年9月3日～4日に、インドのDelhi UniversityでRevisiting Gandhian Perspectives on Development: Reflections on Culture, Society and Politics(開発に関するガンディーの視点の再考:文化、社会、政治についての考察)というテーマで、世界中の著名なガンディー研究者が集いガンディーに関する2日間に亘る国際会議Two days International E-Conferenceが開催されたことである。

更に、上述の「ヒンド・スワラージ」思想を含むガンディー思想並びにガンディーの功績をグローバルな視点から評価することを目的とした3冊の国際共著本が出版されたことが挙げられる。具体的には、③2020年に、インドのResearch Center of Economics, MaduraiのHeadであるShobana Nelascoの編集による『Gandhi A Global Perspective (ガンディー グローバルな視点)』という本、④2021年7月に、アメリカのJames Madison UniversityのProfessorでありMahatma Gandhi Center for Global NonviolenceのDirectorであるTerry BeitzelおよびインドのShivaji UniversityのAssociate ProfessorであるChandrakant Langare両氏の編集による『Rethinking Mahatma Gandhi (マハートマー・ガンディー再考)』『Reflections on Mahatma Gandhi (マハートマー・ガンディーについての考察)』という2冊本(③④合わせて3冊の国際共著本)が出版されたことである。

#### ・東京大学・デリー大学でのイベント、国際共著本と筆者の関わり

上述①の東京大学での式典では、筆者は、「Two freedom fighters for Independence in collaboration with Japan, Mahatma Gandhi and Fujii Guruji, Subhas Chandra Bose and Battle of Imphal 2人のインド独立の闘士との日印協力:マハートマー・ガンディーと藤井グルジー、スバース・チャンドラ・ボースとインパール作戦」という題目で英語及び日本語併用で発表した(注2)。(グルは「師匠」、ジーは「～さん」の意味。ガンディーは藤井日達上人のことをグルジーと呼んだ。)ちなみに、同発表は、東京大学で開催された公開講座や講演会を動画で届けている東京大学公式のウェブサイトである東大TVで視聴することができる(注3)。なお、筆者は、2019年

9月22日に、横浜のシネマノヴェチェントという映画館で、ガンディーと藤井グルジーの関係について、トークショーも行った（注4）。

上述②のDelhi Universityでの国際会議では、筆者は、ただ一人の日本人研究者として参加し、「Contextualizing Gandhi's Hind Swaraj in Contemporary Japanese Art of Living: Some Reflections 現代日本の生き方の術の中に見出されるガンディーのヒンド・スワラージ的な生き方」という題目で英語で発表を行った（注5）。筆者の発表は、現代文明の諸課題に直面した人類がこれまでの生き方を見直そうとしている状況の中で、日本の事例を紹介した発表として、会議に参加した研究者たちから大きな注目を浴びた。

上述③の『Gandhi A Global Perspective』という本は、世界中から選りすぐりの100本のガンディーに関する論文を集めた本であるが、筆者は、ただ一人の日本人研究者として執筆に加わり、「Subhas Chandra Bose, Gandhi and Japan スバース・チャンドラ・ボース、ガンディーと日本」（注6）、「Fujii Guruji and Gandhi 藤井グルジーとガンディー」（注7）という2本の英文論文を掲載した。

更に上述④の『Rethinking Mahatma Gandhi』『Reflections on Mahatma Gandhi』という2冊本は、2冊本合わせて世界中から66人の著名なガンディー研究者の論文を集めた本であるが、筆者は、ただ一人の日本人研究者として執筆に加わり、「Japan and Hind Swaraj 日本とヒンド・スワラージ」という英文論文を掲載した（注8）。

なお、④に関連したものとして、筆者は、インド大使館及び一般社団法人日印サルボダヤ交友会共同主催の「インド独立75周年及び印日国交樹立70周年記念事業」として2022年10月2日に行われたガンディー生誕日の集いにおいて、「The Influence of Gandhi's Hind Swaraj on Japan ガンディーの「ヒンド・スワラージ」思想の日本的展開」という題目で英語を従、日本語を主として発表を行った（注9）。

## ・本論文の目的

本論文は、ガンディー思想の中でも特に「ヒンド・スワラージ」思想に注目し、まず「ヒンド・スワラージ」思想とは何かを明らかにした上で（注10）、筆者の上述の「Contextualizing Gandhi's Hind Swaraj in Contemporary Japanese Art of Living: Some Reflections」という題目での発表及び「Japan and Hind Swaraj」という論文を生かしながら、日本近現代史の中で、「ヒンド・スワラージ思想」はどのような影響を与えたのか、「ヒンド・スワラージ」的な思想がどのように表れてきたのか、「ヒンド・スワラージ」的な思想に基づいた新しい生き方を模索する動きがどのように展開されてきたのかを述べることを目的とする。

筆者が「ヒンド・スワラージ」思想を重要視するのは、「ヒンド・スワラージ」思想が表されている『ヒンド・スワラージ』は、『マハートマ』の著者テンドゥルカルをして「ガンディー思想の精髓」と呼ばしめた著である（注11）からであり、また、世界におけるオルターナティブな

文明や社会を目指す運動に大きな影響を与え続けているからである。

なお、本論文で言う「ヒンド・スワラージ」的な思想とは、日本近現代史において独自に生まれた思想であっても、内実は、「ヒンド・スワラージ」思想と類似している思想のことを指す。そのような思想が日本に生まれたことは、それだけ「ヒンド・スワラージ」思想の普遍性を保証するものと言ってよいと言えるのである。

(本論文での「ヒンド・スワラージ」『ヒンド・スワラージ』の使い分けは、用語として使う場合は「ヒンド・スワラージ」、書として使う場合は『ヒンド・スワラージ』としている点にある。)

## ・本論文キーワード

ガンディー、ヒンド・スワラージ、アーシュラム、近代文明批判、近現代日本

## 1 「ヒンド・スワラージ」思想とは何か—近現代社会への異議申し立て、社会変革とアーシュラム—

### ・近代文明とは何か

『ヒンド・スワラージ』は、先述のように、1909年に、ガンディーがインドの真の独立とは何かについて書いたもので、『マハートマー』の著者テンドゥルカルをして「ガンディー思想の精髓」と呼ばしめた著である。この著の通底にあるのは、近代文明批判であり、ガンディーにとってインドの独立とは、単にイギリスから政治的に独立することを意味するのではなく、インドが真の文明を創り上げることを意味していた。

インドは、イギリスがインドに持ち込んだ近代文明をありがたがってしまったため、イギリスによるインド支配を許したのであり、インドが近代文明から脱却し真の文明を創り上げれば、インドのイギリスからの独立は自ずと達成されるとしたのである。

なお、『ヒンド・スワラージ』は、編集者（＝ガンディー）と読者（＝複数の対話の相手を一括して「読者」としている（注12））の対話形式で論が展開される形を取っている。

まず、ガンディーが言うところの近代文明とは何かを見てみよう。

読者：あなたが（近代）文明について思うところを教えてください。

編集者：「（近代）文明」という言葉で表現されている状態がどのようなものであるのかを考えてみよう。（近代）文明の中に生きている人は、肉体的な幸福を、人生の目的にしている。幾つかの例を挙げてみよう。ヨーロッパの人々は、今日、百年前より、はるかに立派に建てられた家に住んでいる。このことは、文明の象徴であるとみなされており、また、肉体的な幸福を増進させることでもある。昔は、彼らは、獣の皮を着て、槍を武器として使っていたが、今日では、長いズボンをはき、体を飾るために、様々な服を着て、連発ピストルを持ち歩いている。もし、それまでたくさんの服や靴を着用する習慣がなかったある国の人々が、ヨーロッパ

風の服を着る習慣を身に付けるようになると、彼らは、未開状態から脱して文明化したということになっている。…昔は、戦いたい時には、肉体と肉体をぶつけたものであるが、今日では、丘の上で銃を扱う一人の人間が、何千という命を奪うことが可能である。これが（近代）文明である。…昔は、人々は、自家製のパンや野菜を2、3食食べていただけであるが、今では2時間おきに食べ物を求め、他のことをする暇すらないほどである。この（近代）文明は道徳や宗教のことは気にも留めない。（近代）文明の信奉者たちは、自分たちの仕事は宗教を説くことではないと平然と言う（注13）。

上記の文章から、ガンディーは、近代文明とは肉体的な幸福を増進させることであると見ていることがわかる。言い換えれば物質的に豊かになることが幸福であるとするのである。

そして、イギリスのもたらした近代文明をインドが受け入れたために、インドはイギリスに支配されることになったのであるとしている。次の文章には、インド人が自らの欲望のためにイギリス人をインドに招いてしまったことが記されている。

読者：なぜ、イギリスは、インドを奪うことができたのか、そして、今なお、保持することができているのか？

編集者：…イギリス人がインドを奪ったのではない、私たちが、イギリス人にインドを与えたのである。…誰が東インド会社の役人たちを手助けしたのか？誰がイギリス人のもたらす銀に誘惑されたのか？歴史を見れば、私たちがそうしたことすべてをしてきたことは明らかである。…すぐにでもお金持ちになろうとして、私たちは、東インド会社の役人たちを諸手を挙げて歓迎したのである。…お金がイギリス人の神様である。そうすると、私たちが、私たちの卑しい私欲のために、イギリス人をインドに引き留めているということになる（注14）。

そして、次のように、近代文明はよしとしたままで、イギリス人による統治がインド人によるいう統治に変わるだけの独立であるならば、独立にはあまり意味がないとしている。なお、ここで当時近代文明の道を歩み始めた日本について批判的に言及しているのも日本人にとっては興味深いものがある。

読者：私たちは、イギリス人と同じ武力を持つ時に自治を獲得できるのである。そうして初めて私たち自身の旗を掲げることができるのである。（筆者注：日露戦争で勝利した）日本のように、インドもならなければならない。私たちは、私たちたちの海軍・陸軍を持ち、栄光につつまれなければならない。

編集者：あなたの考えは、詰まる所、インドにイギリス人抜きのイギリス的な支配をもたらしたいということになる。あなたは、虎は欲しくないが、虎の性を欲している。つまり、インドを

イギリス風にしたいということである。インドがイギリスのようになるならば、インドは、「ヒンドゥスターン（筆者注：インド人の国）」ではなく、「イングリッスターン（筆者注：イギリス人の国）」と呼ばれるであろう。これは、私が望むスワラージではない（注15）。

#### ・近代文明の産物としての弁護士、医者等への批判を通じた近現代社会の価値観への異議申し立て

『ヒンド・スワラージ』でガンディーは、近代文明の産物としての議会、鉄道、弁護士（及び裁判所）、（近代的医療に携わる）医者、（近代的）教育、機械等を具体的に批判する。特に、鉄道（鉄道は今日の社会に置き換えれば、車、飛行機を含む交通手段とすることができよう）、弁護士、（近代的医療に携わる）医者の批判には力を入れているが、ここに「ヒンド・スワラージ」の真骨頂がある。ガンディーは、一般の人が近代社会の中で普段は何の疑問も持たずにありがたがっているものを批判するのである。鉄道、弁護士、医者というユニークな組み合わせもガンディーならではの。中でも、弁護士、医者は、近代社会においてお金を稼げる職業、名誉な職業とされているが、逆にそうした職業をこそ批判するガンディーの視点は、近代社会の中に浸かっている人々の視点と大変異なっている。人々に視点の転換を迫る上で、弁護士、医者を取り上げた点は、『ヒンド・スワラージ』に書としての面白さも加えている。

例えば、議会では、議員は国民のために奉仕することを忘れて、自分たちの利益追求のために動いているし、首相は自党の勝利を確保することに集中し、議会が正常に機能することに関心を払わない。一方、議員を選ぶ選挙民は教育を受けているものと考えられており、従って彼らの選択には誤りがないということになっているが、実際はそうではないとしている（注16）。

ちなみに、ガンディーは民主主義を最良の政治形態とは考えていなかった。民主主義では、往往にして選挙民は自分に利益をもたらしてくれる人に投票し、議員は選挙で勝つために人気取り政策を提示するものであるからである。ガンディーが最良の政治形態とするのは聖者政治である。後に述べるが、アーシュラム（本論文第1章「『ヒンド・スワラージ』思想とは何か」の中の節「アーシュラム」を参照のこと）は、精神的指導者のもとで、様々なカースト、宗教徒から成る数十人の人たちが自給自足の共同生活を行う場であったのであるが、ガンディーが最良の政治形態をまず小規模な単位で実践する場でもあったのである。精神的指導者が無私の精神で大局的な見地から何が本当の意味で人々のためになるのかを行う政治こそガンディーの理想であった。ガンディーにとって政治形態を良い順番に並べると、聖者政治＞民主主義＞独裁者による政治というようになる。

鉄道は、飢饉の頻度を増やした。なぜなら、運搬の手段があるために、農民は一番高い値がつく市場に穀物を売り払ってしまい、いざという時のための備えをおろそかにするからであるとしている。鉄道は、悪疫を蔓延させた。もし、鉄道がなく、ほんの少しの人たちしかある場所からほかの場所へ行かなければ、伝染病は全国に広がらないとしている。鉄道で邪悪が広がった。例えば、昔は、本当に信仰心の篤い善男善女たちだけが聖地に行ったが、今日では、詐欺師たちが人々を騙すために行っているとしている。人間は、本来、手足を動かすことによって可能な範囲内に行動を制



限するように、身近な隣人に仕えればよいようにつくられているのである（注17）。

弁護士は、紛争を鎮めるどころか、紛争をややかしくするものであり、またそうすることにより利益を上げている。人々が自分たちの間で問題を解決できれば、第三者である弁護士の出番はなかったし、裁判所が設けられることもなかったのであるとしている。

例えば、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が争っている時、普通の常識を持った人ならば、罪は多かれ少なかれ双方にあるに違いないことを話して、これ以上争いを続けることのないように忠告するが、両者が弁護士のところへ行くと、弁護士は、仕事として、依頼人に味方してあげ、依頼人の有利になるよう、抜け道や弁論を見つけ出してあげるのである。つまり、弁護士は、一般には、紛争を鎮めるかわりに、それを助長するのである。

また、人々は、他人を惨めな境涯から助け出すためにではなく、自分が豊かになるために、弁護士を目指す。それは、金持ちになる近道であり、彼らの利益は紛争を増やすことにある。

裁判所に関して言えば、裁判所が設けられたがために、イギリスはインドを支配できたのだとしている。裁判所は人びとの利益のためにあるのではない。権力を握っていたいと思う者は、裁判所を通じてそれを果たすのである。人々が自分たちの争いを自分たちで解決できたなら、第三者が彼らの上に権力をふるうことはできなかった（注18）。

（近代的医療に携わる）医者とは、悪徳をはびこらせた。人々は、医者がいなければ、強い意志の力で自分の体の変調をきたさないように予防に努めるのに、医者がいると、病気になっても、医者にかかればよいとの安易な考えに陥りがちになり、自分の精神に対するコントロールを失ってしまうとしている。

例えば、病気になるのは、自分たちの不養生と不摂生によるのに、食べ過ぎで消化不良を起こすと医者のところへ行くと、医者は薬をくれるので治る。治るとまた食べ過ぎて薬を飲む。最初に薬を飲まなかったら、消化不良の罰を受け、二度と食べ過ぎることはなかったろう。医者が間に割り込んで来て、不摂生の手助けをしたのである。体は、それによって確かに楽にはなったが、精神は弱められた。悪くなれば薬を飲むということが続けていけば、人間は精神のコントロールを失うのである。

なぜ人々が医者職業を選ぶのかも一考に値する。人類に奉仕するために選ぶのではない。名誉とお金を得るために医者になるのである（注19）。

（近代的）教育は、文字の習得を第一義にしている点が問題である。文字の習得自体が悪いわけではないが、道徳や倫理に基づかない単なる文字の習得は、あることをするための手段としてしばしば悪用されてきたとしている。また、イギリスの言語である英語の教育を受けた者がそうでない者を支配していることがイギリスのインド支配を助けて来たとしている（注20）。

機械は、例えば、機械製の織物の生産のために、ボンベイの紡績工場の労働者たちが、奴隷になりさがっている状況や、工場で働く女性の劣悪な状況が生み出されたとしている（注21）。

ちなみに、後に述べるアーシュラム（本論文第1章「ヒンド・スワラージ」思想とは何か）の

中の節「アーシュラム」を参照のこと）で、ガンディーが自給自足を目指したのは、教育に関しては、農業による体をつかう作業も重視し、文字の習得という頭のための教育ではなく、体と頭と両方を教育することを目指したからであり、機械に関しては、機械により工場主と労働者という人が人を支配する関係が生まれるのに対し、自分で生産して自分で消費する限り、支配関係は生まれないからであった。

## ・ 真の文明とは何か

では、ガンディーは、そのように述べたうえで、ガンディーは、「近代文明」に対して、「真の文明」をどのように考えているのであろうか。

ガンディーは、真の文明とは、人間に義務の道を指し示す行動様式であるとする。そして、義務の遂行とは、道德の遵守と同じことであり、道德の遵守とは、我々の精神と情欲の上に支配力を確保することであるとする。ガンディーによれば、幸福とは、主として精神の状態である。人間は金持ちだからといって必ずしも幸福ではなく、貧乏だからといって必ずしも不幸ではない。物は得れば得る程ますます欲しくなり、情欲には耽れば耽るほどますますのめり込むようになる。従って、我々が自分自身を支配することが肝要であり、それを学ぶ時、スワラージが訪れるとしたのである（注 22）。ガンディーにとってスワラージとは、単にイギリスから政治的に独立するという意味ではなく、自分が自分自身を支配する、一人一人の人間が独り立ちする＝独立するという意味なのである。

ガンディーの近代文明批判の特徴は、人間が精神と情欲を支配できなくなったために近代文明が生まれたものであるとしていることに表れているように、人間の内面を問題にしていることである。即ち、スワラージの根本は、人間が精神と情欲を支配できるように自分自身の内面を変革することである。

近現代社会では、人々は権利は声高に主張するものの、義務の遂行、道德の遵守はおろそかになって来ている。近現代社会に見られるモラルの崩壊もそのことと関係があると言ってよいであろう。

## ・ 社会変革

そして、そのような内面変革を達成するために必要とされるのが次に述べるように社会変革である。近代文明の産物として挙げられてきたものは、近代文明を成り立たせている社会の仕組みである。先述のガンディーの議会、弁護士、裁判所への批判の仕方からわかるように、ガンディーは、人々が自分自身を支配できなくさせている状況が、人々が権力者にとって都合のいいように絡み取られ、権力者が人々を支配できるようにさせているとしている。ガンディーは、そうした状況に対し、人々が自分の精神を律し、自分自身を支配し、人々が顔の見える範囲で心と心を通わせることを説いている。ちなみに、ガンディーの医者への批判は、人々が自分の精神を律することができな



くなくなってしまうことと関係している。また、鉄道への批判のところで、ガンディーは、人間は本来、手足を動かすことによって可能な範囲内に行動を制限するようにつくられているとしていたが、この考え方は、人間が共同体のような小さなコミュニティで生きることの大切さを説いているのである。

ガンディーは、そうした社会変革を実現させるために、インドは伝統的に村落共同体が中心の社会であったことを念頭に、村落を改革することを説いた。

ガンディーにとってスワラージは、村落から始まるものであった。ガンディーは次のように述べている。

独立は底辺から始まらなければならない。どの村も十分な権力を持っている共和国である。どの村も自活し、世界全体から自らの村落を守れる程度まで自村に関する事柄を処理できる能力を有していなければならない。村落は外界からの攻撃に対して自村を守るに際しては死ぬ覚悟を有していなければならない。かくして、究極的には個人が単位である。…

この無数の村落によって構成される構造の中に、常に広がるが、決して上向しない円環が存在するであろう。生活は、底辺によって支えられた頂点があるピラミッドではない（注 23）。

そして、インドにスワラージをもたらすためには、村落を改革することが必要であると考えたガンディーは、村落改革のための実践的プログラムである『建設的プログラム』（注 24）を打ち出した。

その具体的な項目は、1. 諸宗教徒間の統一 2. 不可触民差別意識の撤廃 3. 禁酒 4. 手紡ぎ手織り綿布 5. その他の村落産業 6. 村落衛生 7. 新教育、基礎教育 8. 成人教育 9. 女性 10. 健康及び衛生教育 11. 地方語 12. 国語 13. 経済的平等 14. 農民 15. 労働 16. 先住民 17. ハンセン病患者 18. 学生である（注 25）。

それらの項目の中の 4、6、7、8、10、11、12 を見ると、ガンディーが近代文明の産物であるとした（近代的医療に携わる）医者、（近代的）教育、機械製の織物等の問題を解決していこうとした意志が読み取れる。

ちなみに、ガンディーは、『建設的プログラム』の中で、次のように書いている（なお、プールナ・スワラージとは完全なるスワラージの意味である）。

建設的プログラムは、プールナ・スワラージを勝ち取るための、真理に根差した、非暴力による方法です。そのプログラムを全面的に実現すると、完全なる独立となります。国を根底から引き上げるために設計された建設的プログラム全体に、インドの 4 億の人々が熱心に取り組んでいる姿を想像してみてください（注 26）。

スワラージとは何かを『ヒンド・スワラージ』で示したガンディーは、実際にそのようなスワラージを実現することを求めた。

ガンディーが近代文明の産物であるとした議会、弁護士、裁判所の問題解決策としては、ガンディーは、イギリスが破壊したと見なしたインド古来の村落自治組織であるパンチャーヤトの再建を通して村落を建て直そうとした。ガンディーは、理想的な村落自治制度のあり方を次のように述べている。

村民または村民を理解する5人の青年男女から成る各パンチャーヤトを構成単位とする。隣接するこのような2つのパンチャーヤトから1人の指導者が互選され、その指導者のもとに実行委員会を構成する。パンチャーヤトが100集まって、先に2つずつのパンチャーヤトから互選された50名の1級指導者から、2級指導者1名と委員会を互選する。一方、1級指導者たちは、2級指導者ものもとで働く。200のパンチャーヤトは、100ずつの平行する2つのグループとなり、このようなグループがインド全土を覆うことになる（注27）。

上記の発言には、上に位置する者の等級の方が下に位置する者の等級より高いはずであるとの通常の考え方とは異なったガンディーの考え方がよく表されている。それは、上位に位置する者は権力者ではなく単なる調整者であり、実際の村落民の目線に近い位置にいる者程力を有さなければならないと見てのものである。先述の「独立は底辺から始まらなければならない。」の発言にもこの考え方が表されている。自分たちの問題は、他者（議会、弁護士、裁判所）にゆだねるのではなく、自分たちで解決しようというのがガンディーの考え方である。

#### ・アーシュラム

ここで、本論文との関係で重要なガンディーのアーシュラムについて述べる。

アーシュラムは、日本語では修養道場と訳される。アーシュラムでは、精神的指導者のもとで、様々なカースト、宗教徒から成る数十人の人たちが自給自足の共同生活を行う。ガンディーは、彼が望む社会変革をまず小さな世界で実践し、それを全インドに広げていこうとしたのである。ガンディーの社会変革とは、村落改革と同意語であり、アーシュラムでの共同生活の実践は、村落改革の基礎に位置付けられるものであった。アーシュラムでの実践が上手くいくことが、後にガンディーが全インド規模で行おうとした『建設的プログラム』の実践による村落改革への自信ともなっていくのであった。

ガンディーがインドで創設したアーシュラムは、サバルマティー・アーシュラムとセーワグラム・アーシュラムの二つが代表的なものであるが、ガンディーはこれらのアーシュラムの前身ともいべきものを南アフリカにおいて創設していた。

ガンディーは23歳から45歳に至る壮年期に、南アフリカで非暴力運動の原型となるものを創り上げ、それを基に、45歳から亡くなるまでインドで非暴力運動を展開していくのであるが、その南アフリカでフェニックス農場とトルストイ農場を創設していたのである。フェニックス農場、トルストイ農場は、ガンディーのアーシュラムのプロトタイプである（注28）。フェニックス農場、トルストイ農場、サバルマティー・アーシュラム、セーワ・グラーム・アーシュラムでのアーシュラムでの共同生活の実践は、近代文明に代わるオルターナティブな文明や社会を築いていく動きと結び付いていたのである。

## ・非暴力

『ヒンド・スワラージ』では、ガンディーの代名詞ともなっている非暴力の重要性が説かれている点でありにも触れておく必要がある。『ヒンド・スワラージ』で説かれている内容も含めながらこの点を述べておきたい（注29）。

ガンディーは、手段と目的あるいは結果とは一致するとしている。暴力という手段を使えば、相手も暴力を使うようになる。暴力により権利を獲得しようとするならば、皆が権利を獲得しようとして争うばかりである。真の権利は義務の結果得られるものである。独立に関して言えば、暴力で独立という目的を達成したならば、今度は暴力で人々を抑えつけるようになる。暴力を使うのに勇氣はいらない。真の勇氣は、肉体的に力を持っている者から生まれるのではなく、自分の精神を制御した者から生まれるのである。

暴力を使うのは肉体に頼ることであり、肉体に頼るのは、近代文明の発想である。権利ばかり主張するのは、肉体的な幸福を第一義に追求しようとする近代文明の発想である。肉体的な幸福を追求しているのでは、イギリスのインド支配を容認していることになる。精神が肉体的な幸福に負けないこと、精神を支配することが真の独立なのである。

なお、人と人との間の非暴力的な問題解決方法とは、人と人が直接的に向き合い、心と心の対話により自分たちの間での問題解決を目指すことである。ガンディーは、『ヒンド・スワラージ』で近代文明の産物としての弁護士を批判していたが、その理由は、弁護士が存在することで、自分たちがとことん話し合えばできる問題解決を間接的な存在である赤の第三者の弁護士にゆだねることになり、問題を複雑にするからであり、結局、弁護士の存在は、問題を解決するどころかむしろ問題解決から遠のかせるのである。

## ・現代社会のインターネットによる誹謗中傷問題

ちなみに、現代社会は、人と人が面と向かって言い合うのではなく、インターネットを通じて相手を攻撃するようになった。インターネットも間接的な存在である。ガンディーが議会、弁護士などの事例を取り上げながら『ヒンド・スワラージ』全体を通じて述べて来たことは、人と人が間接的な存在に頼らず、直接的に向き合うことの大切さである。

インターネットでは、相手を攻撃する人は匿名で攻撃できるので、相手への攻撃がどんどんエスカレートしてしまう。そして、攻撃は憶測に基づいた考えなどによる根拠のない攻撃であることがままある。また、往往にしてそのような攻撃を自分の欲求不満のはけ口として行ってしまう（インターネットによる誹謗中傷問題として近年大きく取り上げられたものとして、女子プロレスラーの木村花さんがインターネットによる誹謗中傷を苦にして2020年5月に自殺したという痛ましい事件もあった）。

ここにあるのは、相手の言い分にも関心を払い物事の本質を捉えようとする姿勢ではなく、相手の言い分を知ろうとせず、ただ自分の主張を一方的に発散する姿勢である。人と人との関係が間接的になっているがゆえに発生した問題である。弁護士もインターネットも人と人の直接的な関係を妨げるものという点では共通している。ここでいま一度、人と人が面と向かい合うという直接的な形で心と心で対話をすることの意味を考えてみる必要があるであろう。

以上「[ヒンド・スワラージ]」思想とは何か―近現代社会への異議申し立て、社会変革とアーシュラム―を踏まえ、ここからは、「はじめに」で述べた本論文の目的に沿って、論を展開する。特に、1920年代、1980年代、東日本大震災後の時期を取り上げる。それらの時期は、日本において近代文明に反対して新しい生き方を見つけていこうという運動が起こった時期であった。

## 2 日本のベル・エポックとガンディー―1920年代―

### ・ガンディーに関する著作の登場

日本語でのガンディーの最初の伝記（高田雄種による）は、『聖雄ガンダー』（原著タイトルのママ）というタイトルで1922年に出版された（注30）。

高田の本が出版されたのと同じ年に、茂森唯士は、ガンディーの自然への回帰願望と近代文明に反対する姿勢を書いた『ガンディ及びガンディイズム』（原著タイトルのママ）を出版した（注31）。帆足理一郎は、『トルストイとガンディーの宗教思想』（原著タイトルのママ）を出版し、その中で帆足は、近代文明に蔓延する利己主義に反対する姿勢におけるトルストイとガンディーの類似点を見出した（注32）。

なお、ガンディーの闘いの面が描かれている『ガンヂと真理の把持』（原著タイトルのママ）を1922年に出版した饒平名智太郎や鹿子木貞信のような人たちもいたことは忘れてはならない（注33）。

ところで、なぜ1922年なのか？1919年から1922年にかけて第一次反英非協力運動があったが、その運動は1922年に突然停止した。日本人は、中国の民族運動とは異なる種類の民族運動があることに気が付いた。インドの民族運動は暴力的な革命を目指さないという期待があった（注34）。

日本では、『聖雄ガンダー』が出版された1922年は、大正時代であった。大正時代（1912-1926）は、大正デモクラシーの時代であった。政治、社会、文化の各方面で民本主義の発展があった。大正デモクラシーの時代は日本のベル・エポックとも呼ばれうる（注35）。ここで、大正時代に武者

小路実篤とその同志たちが開村した「新しき村」について紹介したい。

## ・新しき村

武者小路実篤（1885-1976）は、日本の小説家、詩人、劇作家、画家として非常に有名な人物であった。1918年、彼は同志たちとともに、理想的な調和のとれた社会と階級闘争のない世界という理想郷を実現するために、宮崎県木城町に「新しき村」と呼ばれる村を開いた。「新しき村」の人々は、主に農業による自給自足の生活を送った。「新しき村」は、生活のためだけではなく、精神性に基づいた世界を確立するために開かれた。「新しき村」の精神は次の通りであった。

1. 私たちの理想は、全世界の人間が天命を全うし、各個人が自分の生来の自我を完全に成長させることである。
2. このために、私たちは、自身の自我を成長させる過程において、他者の自我を害してはならない。
3. それゆえに、私たちは、正しく適切な方法で、私たち自身を成長させるであろう。私たちは、自身の快楽、幸福あるいは自由を追求するにあたって、他者が天命を達成するための努力や正当な要求を妨げてはならない。
4. 全世界の人間が私たちと同じ精神をもち、そうした精神を持った同じ生活を送れるようにするために、全世界の人間が自分の義務を果たし、自由を享受し、正しく生きられるように、天命（個性もふくむ）を全うする道を歩くように心がける。
5. このような生活をしようとする者、このような生活の可能性を信じる者、全世界の人がこのような生活を実行するよう祈る者、この新しい世界を切に望む者、彼らは新しき村の会員である。彼らは私たちの兄弟姉妹である。
6. それゆえに、私たちは、国と国との戦争がなくなる時、階級闘争がなくなる時、あらゆる人々が正しく生きようと努めそして実際に正しく生き始める時、そのような人々が本当にお互い協力する時、私たちの望む世界が来ることを信じる。そして私たちは、このような世界が実現するための努力を惜しまない（注36）。

武者小路実篤は、著書『新しき村の生活』の中の「新しき村の小問答」で次のように語っている。なお、「新しき村の小問答」は、B（＝武者小路実篤）とA（＝質問者）の対話形式で論が展開される形を取っている（旧字体・旧仮名遣いを新字体・新仮名遣いに改めるなど筆者が若干修正した）。

A：君は新しき村を建てたがっているそうだね。僕の弟も仲間に入りたがっている。一体新しき村というのはどんな村なのだい。

B：新しき村というのは、一言で言えば皆が協力して共産的に生活し、そして各自の天職を全うしようというのだ。皆がつまり兄弟のようになってお互いに助けあって、自己を完成するようにつとめようというのだ。

A：それなら田舎に引っ込む必要はないだろう。都会の方が我々の天職を発揮するに都合のいいこともあるだろう。

B：それはないとは言わない。しかし僕達は現社会の渦中から飛び出して、現社会の不合理的な歪みなりに出来上がった秩序から抜け出て、新しい合理的な秩序のもとに生活し直してみたいという気もするのだ。つまり自分達は今の資本家にもなりたくなく、今の労働者にもなりたくなく、今の社会の食客的な生活もしたくない。そういう生活よりももっと人間らしい生活と信じる生活を出来るだけやりたいと思うのだ。

A：人間らしい生活とはどういう生活だ。

B：人間らしい生活というのは、人類の一員としてこの世に生活してゆくのに必要なだけの労働をまず果たして、そしてその他の時間で自分勝手の仕事をしようというのだ。

A：しかし今の世では人類の一員としてしなければならない労働をしない人や、人類の一員としてはいないでいいような労働ばかりしている人がいる。だから君達ばかり、二三十人の人が人類の一員としてしなければならない労働をよし見出したにしろ、それだけの労働では食ってはいけまい。

B：それはそうだ。自分達は少人数だ。現世の経済状態の影響をまるで受けないということとはできない。またともかく現世と色々の点でつながりを断ち切ることはできない。現世には秩序は歪みであっても、各自の生活も歪みであっても、ともかく何千年の間の人の精神が積み重なってなしあげた色々の貴いものがある。自分達はそれは取り込めるだけ取り込むつもりである。その他の点でも現世の経済の支配のある点までは受ける。そして人類の一員として義務を果たすだけでは得たいと思うものを得られない時、それ以上の労働も、それ以上の仕事も皆と一緒にやるであろう。しかし根本の精神だけは忘れないつもりだ。

A：それから田舎に引っ込むのは、都会よりも楽に人間らしい生活ができるからだというのだね。

B：そうだ。つまりできるだけ人間らしい関係のもとに自分達は生きられるだけ生きようというので田舎に入るのだ。なるべく現世の人間同士の関係から離れたくもあるのだ、自分達にとっては仲間の得することが自分の得することになるのだ。仲間の損は自分の損、仲間の喜びは自分の喜び、仲間の悲しみは自分の悲しみ、そういう社会をつくろうというのだ。現世は他人の損は自己の得を意味し、外国の損は自国の得と心得るように出来ている。自分達はそれは間違いだということも、自分達の生活で示したく思っている。そうして同志の増えることは我らの喜びであり、富を少数で占領し後は貧民でないと社会は保たないという考えもついでに事実によってぶち壊したく思っているのだ（注37）。



「新しき村」の精神は、ガンディーのアーシュラムの精神ととてもよく似ていた。ガンディーのアーシュラムには多くの地から人々が集まり、皆が、共に耐えたあらゆる苦難も自分たちが耕した土地のあらゆる実りも分かち合いながら、農村での共同生活に身を捧げた。

ガンディーは、アーシュラムのあらゆるメンバーに真理と非暴力の厳粛なる誓いを立てるよう強く求めた。ガンディーは、彼の弟子一人一人に、真理と非暴力の神聖さ（ガンディーはこれを「愛」とも呼んだ）と、日々の祈り、手作業、農村での自給自足の美徳を教えた（注 38）。

### 3 日本のカウンター・カルチャー運動とガンディー——1980 年代——

#### ・コミュニケーション運動

ここからは 1980 年代の日本のカウンター・カルチャー運動について見ていくことにする。ここで、1985 年に出版された『もう一つの日本地図』（注 39）という本を紹介したい。この本は次のような意味でとても重要である。

日本では 1980 年代は、カウンター・カルチャーとして、新しい社会を作ろうという運動が生まれた時期であった。日本では、東京大学の安田講堂が陥落した 1969 年に頂点を迎えた全共闘世代による学生運動は、その後徐々に衰退の一途をたどった。学生運動がほぼ沈静化した後、新しい生き方を模索し始めた日本の若者世代は、社会変革のための草の根運動を始めた。本書には、そうした草の根運動の多くの事例が書かれている。本書の序文には次のように書かれている（本書のままに、ですます調で記す。筆者が若干修正した）。

『もう一つの日本地図』を発行します。この本は北から南まで、全国各地から寄せられた 156 ヶ所からのメッセージで出発します。…

日航ジャンボ機の墜落、ジエチレングリコール入りワイン事件、軍事費の対 GNP 1 % 枠突破、アフリカの飢餓、AIDS 患者の急増、メキシコの大地震等々と、暗いニュースはあとを絶ちません。そして人類を（もちろん人類だけではありません）何度か死滅し尽くす量の核兵器は、ボタンの押される時を待っています。歴史を振り返って、かつて人類が製造して使用されなかった兵器はないのですから。

人間が自然から湧いてきた存在であることを忘れ、自然を征服の対象として考えるようになってから、どのくらいの歳月が流れたのでしょうか。山は削られ、海は汚され、川は今、死に瀕しています。鳥も草も木も、水も土も空気も、その汚染のスピードを一段と速めています。そして他の何ものでもなく、私たち人間の心の荒廃が、事態をここまで押し進めてきたことを、私たちははっきり知っているのです。

もう間に合わないのでしょうか。この問いに正確な答えを出すことはできません。しかし、私たちは自分自身の内に、誰からも決しておびやかされることのないような平和な心を持つことを願うでしょう。真に人々と和解し、自然と和解し、大宇宙と交感する能力を取り戻すため

に、〈魂を起こす旅〉を続けるでしょう。

この本には、農場、八百屋、パン屋、塩作り、味噌作り、喫茶店、レストラン、本屋、消費者グループ、反戦グループ、反原発グループ、女のグループ、自然保護のグループ、障害者が地域で生きるためのグループ、そして塾、学校、フリースペース、民宿、からだの会、等々様々な分野からのメッセージがあります。

その一つ一つは、出発の意図も、年数も、人数も、経験も、現在かかえている問題もそれぞれ違いますが、読み進むうちに〈いのちのネットワーク〉とでも呼べるような、目に見えない網の目で繋がっていることに気づくでしょう。

この本は、知識として、情報として読まれるために作られたものではありません。この本にあなたの新しい足跡を加え、あなたの「日本地図」を、そして無数の人々が無数の「日本地図」を作り出すきっかけになればと思うのです（注40）。

『もう一つの日本地図』に掲載されているこれら草の根運動で出来上がった様々なグループの中で、農業に関わるグループが多々ある。北海道の士別農園、秋田県のみすず農場、埼玉県の新里農場、千葉県の中村自然農園、長野県の尚天堂農園、大阪府のあおげむら農場、愛媛県のちろりん農園、島根県の弥栄之郷共同体等である。1980年代は、コミューン（生活共同体などと訳される。主に農業などによる自立した生き方を目指していた）を創設し新しい生き方を模索しようとするコミューン運動と呼ばれる運動が盛んな時期であった。筆者は、『もう一つの日本地図』に掲載されている先述のそうしたグループすべてについて詳細に知っているわけではないが、弥栄之郷共同体は、紛れもなくコミューンと呼ばれるものであった。また、掲載されてはいないものの山岸会も当時の注目すべきコミューンであった。筆者は、東大の学生時代に山岸会のポスターをよく構内で目にしたのを覚えている。ちなみに、コミューンを中心的に担っていたのは全共闘世代の人たちであった。

ここで、その弥栄之郷共同体を紹介したい。弥栄之郷共同体を紹介する理由は、筆者は1983年に実際にそこを訪れ一週間滞在したので、『もう一つの日本地図』の中に記されている弥栄之郷共同体の代表が書いた次の文章はそこでの考え方を非常によく表している、と筆者が自信を持って言えるからである。ちなみに、筆者が訪れたのは、当時の朝日新聞に載っていた「農業の体験キャンプをしませんか」との記事を読んで、面白そうだなと興味を持ったことがきっかけである（本書のままに、ですます調で記す。筆者が若干修正した）。

島根県の西部、浜田市からバスで1時間余り入った山の中に、弥栄村があります。僻地の山村の例にもれず、ここも過疎化が進んでいます。私達は都会から入ってきた者ばかりですが、どうしたらこんな過疎村を活性化できるか、ということをテーマに、13年間活動してきました。過疎村はなにも弥栄村に限りません。戦後強力に推し進められてきた、重工業優先、都市優先

の政策の結果、第1次産業と呼ばれる農林漁業の衰退を招いたのは自明のことです。体制の側からは「国際分業論」とやらの論理で、日本の農地は失くなくても構わない、といった極論まで聞こえてきます。

でも、農山村から大量に都市へと流出していった人達に“青い鳥”は見つかったのでしょうか。豊かで、便利で、華やかな都市の蔭に、私達は人間の荒廃を見ました。企業の管理の中で、仕事を与えられ、サラリーを受けとる労働者、自分のための美味しい生活は大事にしても、他人と共に社会の中で生きている感覚に乏しい若者等。そして一方で、都市から一歩出れば、全国至る所、特に山村では過疎化が進んでいるのです。

資本主義的経済合理性の観点だけからいえば、非効率で生産性の低い山村なんて、わざわざ人が住まなくてもいいじゃないか、との意見も正論に見えます。しかし私達は、この価値観をこそ、疑ってかかるべきだと思います。山村が失くなったとして、狭い島国で圧倒的に広い山林を誰が管理するのか、1000年以上も続いてきたであろう山村文化の伝統を全く見ようとしなないのか、都市的要素に満たされなければ、人は幸せに暮らせないのか。

私達は、山村が生きのびてゆく道が、きっとあると思います。…

最近では、都市の消費者の人達も、大勢来られるようになりましたが、もっといろんな立場の人たちと繋がってゆきたいと思います。例えば、人の指図を受けて動くのではなく、自分で段取りを組むのを面白いと思う人、自然を生かし自然に生かされて働くことが好きな人、自分自身を含めて“人間”に興味を尽きない人等。

山村からこそ、今の都市型社会を撃つことができるのです。あなたも、私達の活動に参加してみませんか（注41）。

島根県の弥栄之郷共同体に見られるように、これらの農場の精神は、ガンディー・アーシュラムの精神ととてもよく似ていた。ここで1920年代の「新しき村」の精神もガンディーのアーシュラムの精神ととてもよく似ていたことを思い出すことができる。

筆者が1983年に弥栄之郷共同体に滞在した時は、弥栄之郷共同体を担っていた全共闘世代の人たちと日本各地から集まった筆者を含む様々な若者たちが、共同で農作業をし、毎夜様々な社会問題について討論し、話し合いで日毎の当番を決めて食事や風呂焚きを行う共同生活を行った。こうした共同生活は、ガンディーのアーシュラムにつながるものである。

ちなみに、「NHKスペシャル 家族の肖像 ガンディーを継いで」を手掛けた塩田純は、南アフリカにガンディーの孫のエラ・ガンディーを訪ね、ガンディーのアーシュラムのプロトタイプであるフェニックス農場を案内してもらった時に、エラ・ガンディーが在りし日のフェニックス農場について語った言葉「このアーシュラムはイギリスの思想家ラスキンの理想をもとに創られました。自分たちで野菜を栽培し、服を作り、子供を教育しました。何年もかけて教育哲学を創り上げました。皆が集まって、どうするかなどを決め、とても民主的に運営されていました。」を聞き、塩田

は「これはコムニオン運動だと思った」と述べている。塩田がそう思ったのは、東大の学生時代（筆者注：塩田純は筆者と同じ1960年生まれで、東大の学生時代は1980年代である）に社会学を学び、コムニオン運動に興味を持ち、幾つかの事例について文献などで調べていたからである（筆者注：筆者は、東大の学生時代は歴史学を専攻したが、栗原彬、見田宗介、高橋徹などの社会学のゼミにも参加し、塩田純と同じくコムニオン運動にも興味を持った）（注42）。

## ・非暴力トレーニング

ここでもう一つ述べなければならないことがある。それは、阿木幸男著『非暴力トレーニング』（注43）という本が1984年に出版されたことである。2001年に出版された和光大学非暴力研究会によって書かれた「非暴力トレーニングの思想と歴史」（注44）という論文には次のように書かれている（筆者が若干修正した）。

非暴力トレーニングはガンディーの時代にさかのぼる。ガンディーは非暴力を日常から実践するためにアーシュラムをつくった。アーシュラムは、インドで精神的指導者たちが、自分の精神を具現するために、弟子や協力者とともに共同生活を営み、日常的に非暴力を学ぶ場であり、闘いの拠点であり、生活の場であった。

日々生まれる問題の中でより非暴力的に生き、非暴力的に問題に対応していくために、最低でも5つのことが必要である。

- 1 個性を認めること
- 2 気持ちや情報、経験をわかちあうこと
- 3 理解してくれる仲間をつくること
- 4 問題解決の力があること
- 5 生きる喜びを持っていること

（和光大学非暴力研究会のメンバーの一人が）非暴力トレーニングを実践する場として1971年に設立されたフィラデルフィア・ライフセンターで2年間非暴力トレーニングを受けてきた阿木幸男のワークショップに参加することになった。…

講演者の阿木さんは「一人一人と世代の違う人同士でもいろいろ考え、それをどう共に作っていけるのか、が課題であり、講師はその手助けをするだけなのである。だから、参加者が懸命に参加してくれれば講師はやることはない。大まかな計画を立てて、みんなが一生懸命できれば、後は自然と形になっていくものだと思う」とおっしゃった（注45）。

上記の文章から、日本では、フィラデルフィア・ライフセンターで非暴力トレーニングを学んだ

阿木幸男が日本に非暴力トレーニングを導入したこと、また非暴力トレーニングはガンディーと彼のアーシュラムに関連していたことがわかる。ガンディーとアーシュラムの関係は、本論文の中心的なテーマとなっているものでもあり、大変重要である。

阿木幸男の『非暴力トレーニング』では、阿木がガンディーに影響を受けるようになった経緯を次のように書いている（筆者がわかりやすく抜粋した。筆者が若干修正した）。ちなみに、阿木は1947年生まれでコミューンを担っていた世代と同じの全共闘世代である。

（当時は）大学全体が揺れ動いていた。

授業料値上げ問題、日米安全保障条約、ベトナム戦争、大学のカリキュラム問題などで、大学のキャンパスでは連日のように、集会、デモがもたれた。

多くの学生がそうであったように僕もその渦中で、怒り、嘆き、迷いながらも、クラス討論、集会、デモに参加した。…

（だが）その当時の自分の中に確固とした「非暴力の思想」が育っていたわけではなかった。ただ、「これは自分のやり方ではない」という思いはしだいに強くなっていった。

そんなある日、キャンパス内を歩いていて一枚のポスターが眼にとまった。…それは、フレンズ国際ワーク・キャンプ（FIWC）というグループの呼びかけであった。そこには、次のように書かれてあった。

「主義主張、思想、国籍、信仰信条、社会階層等、あらゆる既成概念を超えて、人間皆兄弟の精神を基盤にして、より良き社会を建設しよう！言葉より行動を！」

その呼びかけ文はとても新鮮なひびきで僕の心をとらえた。早速、連絡を取ってみると、夏のワーク・キャンプのお知らせが届いた。それは山梨県の山奥の養護施設での労働奉仕のキャンプであった。僕は好奇心半分で参加することにした。

施設近くの家で30名程の男女が泊まり込み、早朝から夕方まで、無償の労働に汗を流したり、施設の子供たちと遊んだりした。交替で、料理、片付け、掃除をし、夜は「社会福祉」、「学生生活と生きがい」、「より良き社会の建設」などについて討論した。…

フレンズ国際ワーク・キャンプの活動を続けていく中で、マハートマー・ガンディー、マルティン・ルーサー・キングなどの書物を読み、影響を受けた（注46）。

その後、阿木は、ワーク・キャンプの活動を続ける一方、当時のベトナム戦争に反対する非暴力運動に興味を持ち、1972年の夏には、日本で最初の「社会変革のための非暴力トレーニング・セミナー」に参加した。これは、アメリカのフィラデルフィア・ライフセンターから2人のトレーナーを招いてのセミナーであった（注47）。

（セミナーでは）セミナーへの要望、食事当番、掃除、宿泊場所の使用上の注意、マスコミの

取材などについて、全員で話し合い、ひとつずつ決めていった。…

ものごとの決定のしかたも多数決の方式をとらず、全会一致（コンセンサス）を原則とすることにしたから、一人でも強硬に反対する人がいると前に進まない。

この話し合いのプロセスが一つの訓練であることを、後で知らされて、なるほどと思った。

意見を異にする人たちが、お互いに納得するまで徹底して話し合った後に、グループとして決定を下すということが、社会変革の活動において、いかに重要なことであるかを学ぶことになった（注48）。

そして、阿木は、本格的な非暴力トレーニングを受けるために、ついにアメリカのフィラデルフィア・ライフセンターへ赴いた。阿木は、ライフ・センターでは、「非暴力トレーニング・プログラム」などに参加すると同時に、ライフ・センターを拠点に、非暴力的な方法で農場労働者が劣悪な労働条件の改善を求めて始めたストライキを支援するなどして、非暴力を使って実際の社会問題解決のために取り組み、非暴力を単なる理論としてではなく、社会変革のために如何に実践していくかを学んだ（注49）。

アメリカから帰国後は、日本で非暴力を使って実際の社会問題解決のために取り組み始めた。具体的には、1978年5月に発足した「市民エネルギー研究所」の、市民レベルでエネルギー問題を研究・調査し、原発ではなく安全な代替エネルギーを求めていく活動、1981年夏に生まれた「反原発よいこの会」の活動、「フレンズ国際ワーク・キャンプ（FIWC）関東委員会」の活動に関わりながら、非暴力トレーニングのトレーナーを続けた（注50）。

阿木は、そうした経験を基に『非暴力トレーニング』を書きあげ、そして出版したのが1980年代の1984年のことであったのである。

ちなみに、筆者は、実際に1980年代半ばに、多摩で行われた非暴力トレーニングに参加したことがある。そこでは、如何にして怒りの感情が湧いてくるか、人は如何に人を見た目で判断しているかなどのプログラムが用意されていた。具体的には、前者に関しては、「皆さん目をつむって、今までの経験から怒りの感情を思い出してください。」というコーディネーターの声と共にプログラムが始まり、目をつむった人たちが次々に怒りの声を発していったのであった。後者に関しては、一人を立たせ、その人の周りを皆で囲み、周りの人たちが見た目だけで次々に勝手な印象を述べていったのであった。

阿木が描写したワーク・キャンプやセミナーにおける共同生活は、ガンディーのアーシュラムにつながると言ってもよい。

また、阿木が日本に導入した非暴力トレーニングは、ガンディーの非暴力運動を日本で如何に実践していくかを考える時の一つの方法を提示したと言ってよい。



#### 4 東日本大震災後の日本人にとってのガンディー

##### ・ガンディーからのメッセージ

2011年3月11日、東日本大震災が発生した。ガンディーの哲学は、災害で大きな被害を受けた日本人に、どのような助けとなったのであろうか？この章では、そのことについて考えてみたい。

津波は東北地方の沿岸地域に壊滅的な被害をもたらした。津波がもたらした更に深刻な影響は、福島第一原子力発電所への重大な被害であり、膨大な放射能が放出され、長期的な健康被害と環境破壊を引き起こした。地震による死者と行方不明者の数は、2019年3月10日時点で18430人であった。

東日本大震災で打撃を受けた日本人をガンディーの言葉で勇気づけようと、東日本大震災の直後に出版され、多くの人に読まれた『ガンディー 魂の言葉』（注51）という本を紹介したい。ガンディーの言葉を東日本大震災後に苦しんでいた日本人の心に届ける上において、この本は重要な役割を果たした。この本の中のガンディーの言葉は、日印サルボダヤ交友会の会員によって翻訳され、この本の監修は、日印サルボダヤ交友会の理事が行った。ちなみに、日印サルボダヤ交友会は、1961年に日本山妙法寺の創設者である藤井日達上人（1885-1985）を初代会長として、ガンディーの唱えるサルボダヤ精神と日本の仏法による非暴力によって平和社会建設を目指して設立された会である。この本の序文には次のように書かれている（本書のままた、ですます調あるいは、だ・である調で記す。筆者が若干修正した）。

2011年の春、日本人のすべてが、2つの黙示録的な破壊の渦に巻き込まれました。地震と大津波という大自然の強大な自然災害。そして、その大地と海の身震いだけで瓦解した、原子力発電所の放射能被害という人的災害に。

それまで、誰も疑うことのなかった日本人の普通の暮らしが、問答無用に、一切の斟酌なしに消え去りました。…

わたしたちは、大津波に崩壊する街の姿に、そして水蒸気爆発を起こす原子力発電所に、いまある文明の終末の姿を確かに見たのです。…

もうこの文明は、この暮らしはだめではないか、と、心の奥底からそんな声が湧き出ているのに、その声に耳を塞ぐ自分がいます。

それは、自らを変えることへの恐れです。

そんなわたしたちに、70年前に生きた、ひとりの老人の声が聞こえてきます。…

「この文明は、文明と呼ぶに値しない。」…

ガンディーは、イギリスに代表される機械文明に対し、インドがもち続けてきた精神文明の素晴らしさを語りました。…

ガンディーは、この優れた文明をもつインドの人々の心の奥底には、深い神への畏敬、広い世界への愛、そして、世界に奉仕するためであれば自己犠牲も厭わない、高貴な精神が宿ってい

ることを告げます。…

人間の真の自由は、機械文明がつくるグローバル経済から自立した、一人ひとりの手仕事の中にある。その手仕事は、農村コミュニティの豊かな連鎖が育む、真の人間のための経済をつくりだしていくのではないか。ガンディーはその生涯を通じて、そう問いかけています（注52）。

『ガンディー 魂の言葉』は12章から構成されている（注53）。章の見出しは以下の通りである。

- 1 打ち砕かれた心のために
- 2 暴力にさらされた世界
- 3 非暴力への道
- 4 捨てることから始めよう
- 5 近代文明の悪から離れて
- 6 道徳なき経済はいらない
- 7 農村に帰ろう
- 8 手仕事のある簡素な暮らし
- 9 健やかな体であるために
- 10 幸せを求める心のために
- 11 愛と死について
- 12 いま、この社会を変えるために

本書で取り上げられているガンディーの言葉の幾つかを紹介してみよう。

「1 打ち砕かれた心のために」の中では、次のような言葉が取り上げられている。この言葉と一つ下の言葉（「4 捨てることから始めよう」の中の言葉）は、震災で打ちひしがれた人々に対しての、前に向かって生きるための心構えの言葉に聞こえる。

運命は私たちがつくるものである。いまからでも遅くない。今をどう生きるかで、未来が決まる（注54）。

「4 捨てることから始めよう」の中では、次のような言葉が取り上げられている。

たとえ億という富を持っていても、それを個人の富と思ってはいけない。ひとたび災害にあえば、わずかな身の回りの物しか残らないのだから。この世にあるものはすべて、生成と消滅を繰り返すものと考えれば、人は物欲の執着から逃れることができる。非暴力の意志をもって生きる人の鉄則は、何物をも所有しないということだ（注55）。

「7 農村に帰ろう」の中では、次のような言葉が取り上げられている。この言葉は、アーシュラムを思い起こさせる。

私は断言する。真の非暴力社会を実現できるのは、巨大産業社会などではない。それが実現できるのは、自給自足の暮らしの仕組みが整った、村社会である（注56）。

「12 いま、この社会を変えるために」の中では、次のような言葉が取り上げられている。これらの言葉は、7つの社会的罪に関するガンディーの有名な言葉及び日本人に送る言葉である。

まだ知らない人がいたら、知っておいてほしいことがある。

現代社会に巣食う7つの大罪とは、理念なき政治、労働なき富、良識なき快樂、貢献なき知識、道徳なき商業、人間性なき科学、献身なき信仰、読者はこれを頭ではなく、心に刻みこんでほしい。こうした罪を犯さないために（注57）。

あなたに差し上げるメッセージは次のことに尽きる。

「日本が古来受け継いで来たものに忠実でありなさい。」

仏教が興ってから2500年経つのに、その教えはいまだ真に生かされてはいない。

しかし2500年が何であろう。時の巡りの中のほんの一瞬に過ぎない。仏陀が説いた不殺生・非暴力の花が、今はしおれかけているように見えるが、それを精一杯、満開に咲かせなさい（注58）。

本書の目的は、日本人がこれまでの生き方を見直し、新しい生き方を目指すことにより、東日本大震災による災害から日本人が復興する手助けをすることにある。新しい生き方とは、近代文明のあり方を根本から考え直し、物質的に満足する生活よりも精神的に満足する生活を求めたガンジーの思想に沿った生き方である。そして、新しい生き方のためには豊かな農村の連鎖を育む必要があるとした。

#### ・ナーラーヤン・デサーイからのメッセージ

ここで、「もし今、ガンディー生きていたら―遺志の体現者が送る大震災被害の日本人へのメッセージ」（注59）という論説を紹介したい。ここでの「体現者」とは、ナーラーヤン・デサーイ（1924-2015）のことである。ナーラーヤン・デサーイは、2015年3月15日に90歳で亡くなった非常に有名なガンディー主義者である。つまり、東日本大震災が起こった時には生きていたことになる。ナーラーヤン・デサーイは、実際にガンディーと共に活動した最後のガンディー主義者の一人であると言える。この論説は、日印サルボダヤ交友会が発行する『サルボダヤ』に書かれたもの

である（本書のままに、ですます調で記す。筆者が若干修正した）。

この（福島第一原子力発電所の）大惨事を前にして、「私は以前から原子力の危険性を指摘してきた」と敢えて言うのは失礼です。素直に、そして謙虚な気持ちでこの惨事を第二の警告と受け止めるべきだと私は言いたい。第一の警告は広島と長崎で受け取っています。それは日本だけでなく全人類に対するものでした。…

原子力は放射能を出す上、決して安く手に入るものではありません。かつまったく安全ではないことが立証されています。それにも関わらず、日本が原子力を利用するようになったのは、恐らく次の理由からでしょう。一つは、エネルギー資源が乏しかったこと。次に、政府が発展の意味を「物質的な豊かさを求めること」と定め、競うことで経済成長を目指したこと。この中で、他人を犠牲にして成り立つ発展は偽りであるということを完全に忘れてしまったのです。加えて、西洋への強い憧れから、西洋の価値観、生活様式、文化などを理想と捉えて自分たちのアイデンティティを忘れ、西洋を模倣しながら発展を競ってきました。その結果、手に負えない事態が起きているのです。その行き着いた先が「科学技術には誤りがない」という過信です。それ以前に世界の大国も同じように過信し続けて過ちを犯しました。けれども私たちは自らを完璧だと信じて疑わず、人間は過ちを犯すという当たり前のことを忘れてしまったのです。…

この大惨事を機に、これまでの考え方を改めようとは思いませんか？（注 60）

強者の力が肯定され、真理が否定されるのは社会の罪です。これに対し何をすべきか、改めて考えねばなりません。その際、問題を3つに分けることができます。まずは個人の問題。次に人と人、そして共同体の問題。最後に人間が自然とどう向き合うかという問題です。

個人の問題としては、皆が欲望の充足を追求するのをやめるべきです。自分自身を抑制し、良心に照らし合わせて善悪の判断ができる生活のあり方を見出さねばなりません。そして満ち足りて生きることの本当の意味を知るために、競争ではなく他者との絆を結ぶ気持ちを育むのです。それは際限ない消費願望を捨て、「分かち合い」と「思いやり」をもって、物を手にするだけでは満たせない、心からの喜びを知ることから始まります。弱者が底辺で苦しむようなピラミッド型の仕組みでは平等な社会は成り立ちません。個は共同体のために、共同体は地域全体のために尽くしていく。その過程で連帯感の輪が生まれ、それは波紋のように個を中心として広がっていきます。将来の社会基盤はこのようにして作らなければなりません。その際、サイエンス（科学）とスピリチュアリティ（高邁な精神）の融合が不可欠です。科学的にものを捉え、スピリチュアリティを人生の道しるべとするのです。

科学的にものを捉えるとは、心からの満足とは何か、どうすれば社会で価値観の違う者同士が共存できるのか、そして人間と自然との共生について答えを探し出すことです。これには、よ

く自分自身を見つめ、偏見のない視点で現実を吟味してその本質を見極めるという作業が必要です。もちろん、失敗からやり直す柔軟な考え方も忘れてはなりません。スピリチュアリティとは、人間が一番優れているという考えを捨て、人は自然の一部であり、一なるものが天地のすべてを司っていると悟ることです。そして生きる上で結果を得るためには手段を問わないという考えではなく、真理に叶った手段こそが正しい結果を生むと信じることです。なぜなら自分と自分の行動、そして結果というこの3つは互いに切り離せないからです。これは人生を導く道しるべとなり、科学はそれが示す方向へ進むための力となります。

現代では政治でも社会でも「力」が幅をきかせています。強者が力を振るう政治が行われ、自由競争・グローバル化という名で利益優先の市場化が進んでいます。このなかでは一般大衆が犠牲にされ、利益を得るのはわずかな人々なのです。このような社会には自由や平等はありません。そこでは他者に対する思いやりは消え失せてしまっています。その大きな理由は、権力が一極に集中しているために、人々のつながりが失われつつあるからです。持つ者も持たざる者も、搾取する者もされる者も、共に人間らしさを失っているのです。人々がしっかりとした絆で結ばれた社会を作るなら、個人の価値観と社会構造を同時に変えていかななくてはなりません。つまり生活を根底から変えるほかないのです。

社会を崩壊へ導くのは、富への行き過ぎた執着、抑制のきかない権力、度を越えた野心などです。これに対し私欲を抑え、権力に屈せず、自分本位の考えを変えなくてはなりません。結局、個人が変わらなければ、社会は変わらないのです。ねたみ、野心、そして戦争にもつながりかねない競争をやめ、喜びと悲しみを共有し合える、分かち合いと思いやりの心にあふれた社会を作るべきです。そのためには、誰もが社会に積極的に参加できるような社会構造に変える必要があります。社会参加によって個々が社会の恩恵を受け、自身の義務も果たせます。これはお互いをよく知っているような小さな共同体でのみ実現できます。新しい社会は小さな集まりから作るのです。そのためには様々な社会をよく見て、実験を繰り返していかななくてはなりません。これは、君たち新しい世代の人たちの仕事です。私たち古い世代の人間は、社会をここまで発展させてきました。ここから先、社会を前に進めていくのは、君たちの役目です。人類の歴史から、少しは実例を見つけられると思います。まず歴史を学んで社会に必要なものを探り、それを発展させていくのです。古い社会の有益なものをうまく取り入れ、新しい社会を作るという意味です。決して古い社会の仕組みをそのまま新しい社会に導入するということではありません。もしかすると、私の話は夢のようだと感じるかもしれませんね。けれども社会変革は夢を見て初めてできるものではないでしょうか？私が今述べていることは、決して実現が難しいと思っていません。というのは、私は自分の経験から何をすべきかを理解した上で伝えているからです（注61）。

社会変革の第一歩は人々の問題意識を高めることです。…次に人々の個々の力を組織すること

です。これは権力を持つということではありません。権力を握って変革をするのは真の変革とは言えません。なぜならば、そのような変革は、社会の古い仕組みを強固にするだけだからです。新しい堅実な組織は、下から上へ、共同体や仲間のような小さな集まりから作りあげるべきです。…

私たちは、どんなに小さくとも、健全な社会を作るためのモデルを各所に作るべきです。なぜならば、そうしたモデルは、変革を阻もうとする者と闘う時に砦となるからです（注 62）。

上記のナーラーヤン・デサーイの論説を読むと、『ガンディー 魂の言葉』という本とナーラーヤン・デサーイの論説が東日本大震災を同じように捉えていることに気付く。即ち、東日本大震災は近代文明（物質的豊かさを求める文明、欲望を満足させることを志向する文明）の災害であるとしている点、他者への思いやりを基本とする新しい社会を建設する必要があるとしている点、そのような社会を構築する基本単位は共同体などの小さなコミュニティであるべきであるとしている点である。

#### ・梅原猛からのメッセージ

更に、梅原猛が書いた「原発事故は「文明災」、復興を通じて新文明を築き世界の模範に」（注 63）という論説を紹介することも興味深い。梅原猛（1925-2019）は、日本仏教を中心に置いて日本人の精神性を研究したことで非常に有名である。

今回の東日本大震災で、被災した方々の道德心の高さ、生きていることを喜んで、互いに助け合っている姿を知り、日本の将来に希望を感じている。

ここ数年、一部の日本人の道德心が墮落したことにより、動機のはっきりしない凶悪犯罪も起きていた。しかし、ほとんどの人々は、非常にしっかりとした道德心を持っている。

仏教の徳が、日本の人々の心のどこかにいきづいているように思う。たとえば、思うようにならない天災を、「仕方がない」と受け入れ、逆に前向きに生きていこうとする。こうした姿勢は、大乘仏教の忍辱、つまり、精神的な屈辱や苦難に耐え、自分の道を貫くという考えからきている。日本のようなモンスーン地域では、しょっちゅう天災がある。このような地域で、自然とともに生きていくための知恵だ。一種のあきらめの精神ではあるが、日本の優れた文化でもある。

このように一般の人々の道德心が高い一方で、政治家、実業家、学者、芸術家などの多くが、道德心を失っている。特に政治家は、金銭欲、権力欲にとらわれ、私的利益ばかり追っている。また、スリーマイル島やチェルノブイリの反省も生かさず、今回福島でも事故を起こした原子力発電を推進している東京電力は、優良企業と呼ばれてきた。しかし、これはどこか間違っていたのではないか。



福島原発の事故の後に行われたドイツの州議会選挙では、反原発を掲げる緑の党が躍進した。今や、原発は日本だけでなく、世界の問題となっている。原発をやめさせようとする世界的な流れが起こっているのだ。とはいえ、原発を廃止するのもおカネがかかる。廃棄物処理の問題も残ったままだ。人間は、本当にやっかいなものをつくってしまった。

今回の事故は、あらためて近代文明の是非を問い直し、新しい文明を作るきっかけにもなるのではないか。まずは日本が率先して原発のない国を作り、それを世界に広げていくべきだと思う。

そのためにやるべきことは二つ。

まず、代替のエネルギーとして、太陽光エネルギーの研究をすすめるべきだ。これまで、原発を推進する研究に莫大な研究費を投じてきた。その研究費を、太陽光エネルギーに投入する。日本企業も京セラなどはこれまでも取り組んできたが、それ以外の企業も本気で取り組むべきだろう。

もう一つは、過剰なエネルギーを浪費するような生活から脱却すること。今原発が賄っている電力は全体の3割程度。太陽エネルギーによる代替とともに、一人ひとりが生活を改めることが重要だ。

スリーマイル島の時も、チェルノブイリの時も、国や東京電力は、日本の原発は絶対に安全だと言い続けてきた。しかし、日本の原発だけが安全などということはあるわけがない。今回の事故で、それが明らかになった。今こそ原発から脱却する新しい国をつくらなければ、必ずまた同じような事故が起こる。

原発の事故は、近代文明の悪をあぶりだした。これは天災であり、人災であり、「文明災」でもある。

今回の震災について、石原慎太郎（注64）さんが「天罰」という発言をされたが、何の罪もない一般の人々が被害にあわれたこの災害に対して、「天罰」という表現は間違っている。もし「天罰」があるとするれば、それは道徳心を失った政治家、実業家に対して下らねばならない。

今も原発の現場では、自らの身の危険を顧みずに復旧作業にあたっている作業員の方もいらっしゃる。日本人には、本当に立派な人がいると感じる。こういう心を皆が持って、新しい国づくりをしていかなければいけない。そして、新しい日本が模範となれば、世界をも変えていくのではないか。今こそ、経済力だけでなく、新しい価値観で世界に範を垂れる国をつくるときだ（注65）。

梅原猛も東日本大震災により原子力発電所が被った被害を近代文明の災害であると考えている。しかし、被災した人々が高い道徳心を持ち、お互い助け合って生きている点に希望があり、復興を通じて新たな文明を築く必要があると考えている。

『ガンディー 魂の言葉』という本、ナーラーヤン・デサーイの論説、梅原猛の論説は近代文明

の問題を指摘している。

### ・共働学舎

東日本大震災後における日本で注目すべきアーシュラム的なものとしては、共働学舎がある。共働学舎自体は1974年に生まれたものであるが、東日本大震災以降、共働学舎によく人が訪れるようになったのである（注66）。

その理由を述べる前に、まず共働学舎とは何かについて述べたい。

共働学舎は、1974年に、長野県北安曇郡小谷村立屋集落にて、「競争社会ではなく協力社会を」という理念のもとに生まれた。

創設者の宮嶋眞一郎は、東京の自由学園で教師をしていたが、40歳を過ぎた頃自分の目が見えなくなっていくと知り、50歳の誕生日に学園を去った。健康な人の教師でいるよりも、体の不自由な人や社会の中で生きづらい人たちと共に過ごす場を作りたいと考えたのである。

1974年、彼の呼びかけによって、電気も水道も通らない信州の小さな小屋に集まった人たちは20人であった。彼らは、まず米や野菜を自らの力で作り出す農業を始めた。

その後、1976年には、長野県小谷村真木に真木共働学舎が開設、1977年には、北海道小平町寧楽に寧楽共働学舎が開設、1978年には、北海道新得町に新得共働学舎が開設、1985年には、東京都東久留米市に南沢共働学舎が開設され、それぞれの土地や人の特徴を生かしながら、運営されている。

共働学舎では、身体的、精神的、あるいは境遇上の様々な差異を持つ人たちが、自分たちの得意とすること、苦手とすることを協力して担い合い、互いに支えながら共同生活を送っている。一人一人が持つ個性や能力を尊重し、皆が農作業や動物の世話など日々の仕事と向き合っている（注67）。

さて、東日本大震災以降、共働学舎によく人が訪れるようになった理由について、2013年より1年間、週日、真木共働学舎で暮らしたカトリック司祭の伊藤幸史は、自身の体験から次のように述べている（筆者が若干修正した）。

共働学舎に最近よく人が訪れてくる。東日本大震災以降、その傾向が顕著である。一体なぜか。ある時、そんな青年の一人と一緒に農業をしながら訪ねたことがある。「ここでの生活は大変でしょう。なぜここに通い続けるのですか？」物静かな、多分何らかの心の病を抱えている人だった。その人はこう言ったのだ。「今までずっと“生きづらい”思いをしてきた。でも、ここには私の“居場所”がある気がする。」

“居場所”がある。それは衝撃的な言葉だった。確かに共働学舎は人間関係も複雑で問題もたくさんある。それはメンバーがありのままの姿を、つまり良きも悪しきも、優しさも醜さも、すべてをさらけ出して生きているからだ。しかし、そのありのままの姿がここでは根本的には

受け入れられている。ぶつかり合っても排除されることなく、罵り合っても受容し続けた 40 年の歩み。こうした寛容な姿勢が、現代社会で生きづらさを感じている人々に“居場所”を提供し続けているのではないだろうか（注 68）。

ちなみに、東日本大震災後の 2013 年 2 月から 2014 年 6 月までロケが行われ、2015 年 5 月 1 日に公開されたドキュメンタリー映画「アラヤシキの住人たち」は、真木共働学舎で共同生活を送る 20 ～ 60 代の年齢も個性も多様な男女数十人の姿を描いている。

## おわりに

『ヒンド・スワラージ』では、衣食住、議会、鉄道、弁護士（及び裁判所）、（近代的医療に携わる）医者、（近代的）教育、機械等近代文明の産物で私たちが普段当たり前と思って享受しているものにこそ批判の目を向け、私たちにあるべき生き方を示した。

20 世紀から今日に至る日本の歴史の中で、ガンディーのそのような『ヒンド・スワラージ』に書かれている思想は、新しい文明を築いていくための、そして、共感と分かち合いに基づいた新しい人間関係を作っていくための役割を果たして来た。

日本とガンディーの遭遇は 1920 年代に遡る。ガンディーは、近代文明に反対の立場をとる高田雄種、茂森唯士、帆足理一郎によって日本に紹介された。

1920 年代の日本は、新しい生き方が生まれた時期であり、ベル・エポックのような時期であった。それは、大正デモクラシーの風潮によるものであった。武者小路実篤と彼の同志たちは、「新しき村」と呼ばれる村を開いた。「新しき村」の精神は、ガンディーのアーシュラムの精神ととてもよく似ていた。

1980 年代の日本は、カウンター・カルチャーとして、新しい社会を作ろうという運動が生まれた時期であった。この運動の中では、多くの（共同体）農場が作られたが、そうした（共同体）農場を作る運動は、コミュニン運動とも呼ばれた。それらの（共同体）農場の精神は、ガンディー・アーシュラムの精神ととてもよく似ていた。また、この時期のもう一つ注目しなければならない点は、非暴力トレーニングという考え方が日本で紹介されたことであった。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災が発生した後の日本では、注目すべき 1 冊の本、2 編の論説が生まれた。

本では、日印サルボダヤ交友会の理事が監修した『ガンディー 魂の言葉』という本が東日本大震災の直後に出版され、多くの人に読まれた。

論説では、日印サルボダヤ交友会が発行する『サルボダヤ』に著名なガンディー主義者であるナーラーヤン・デサーイが書いた「もし今、ガンディー生きていたら―遺志の体现者が送る大震災被害の日本人へのメッセージ」という論説と、梅原猛が書いた「原発事故は「文明災」、復興を通じて新文明を築き世界の模範に」という論説があった。

また、東日本大震災以降、共働学舎というアーシュラム的なものによく人々が訪れるようになるという現象が起こった。

近代文明の問題に直面した東日本大震災後の日本では、それまでの生活を見直し、小さなコミュニティを核としながら他者への共感を持って暮らし、新しい文明を築いていこうという新しい動きが起こった。

ガンディーの思想は、20世紀から今日に至る日本の歴史の中で、重要な役割を果たして来たと言える。その思想は、日本人に共感と分かち合いによって生きていくことへの重要性を示し続けて来た。そして、そのように生きていくためには、人間関係は顔が見える関係でなければならないと、そのような関係を作るためには、小さなコミュニティの価値が見直されなければならないとした。その思想は、人々をお互いに分断する近代文明に代わって、新しい社会、新しい文明を築いていくための方向を示し続けて来たのである。

## 注

- 1 M. K. Gandhi, 'Hind Swaraj', 22 November 1909 in *The Collected Works of Mahatma Gandhi*, Ahmedabad: Navajivan Trust, 1963, vol.10, pp.6-68.
- 2 Akira Hayashi 林明「Two freedom fighters for Independence in collaboration with Japan, Mahatma Gandhi and Fujii Guruji, Subhas Chandra Bose and Battle of Imphal 2人のインド独立の闘士との日印協力：マハートマー・ガンディーと藤井グルジー、スバース・チャンドラ・ボースとインパール作戦」（英語及び日本語併用で発表）150<sup>th</sup> Birth Anniversary of Mahatma Gandhi@UTokyo Homecoming Day ガンディー生誕150周年記念式典@東大ホームカミングデー、2019年10月19日、The University of Tokyo 東京大学。ちなみに、ガンディーと日本の関係については、Thomas Weber and Akira Hayashi, "Mahatma Gandhi: The Japanese Connection", *Gandhi Marg*, New Delhi, India: Gandhi Peace Foundation, 2016, vol.37, nos.3&4, pp.407-433. 及びその日本語版論文である林明「マハートマー・ガンディーと日本の関係」弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』第17号、2024年、1-28ページを参照のこと。  
上記英文論文“Mahatma Gandhi: The Japanese Connection”の要約は、  
<https://www.mkgandhi.org/articles/mahatma-gandhi-the-japanese-connection.php>を参照のこと。
- 3 Akira Hayashi「Two freedom fighters for Independence in collaboration with Japan, Mahatma Gandhi and Fujii Guruji, Subhas Chandra Bose and Battle of Imphal」UTokyo/TV, 2020. 林明「2人のインド独立の闘士との日印協力：マハートマー・ガンディーと藤井グルジー、スバース・チャンドラ・ボースとインパール作戦」東大TV、2020年。
- 4 林明「スニール・ダット氏の長崎・広島平和行進 藤井日達上人とマハートマー・ガンディーの出会い」（映画「ラーマーヤナ」上映後のトークショー）、2019年9月22日、シネマノヴェチエント（横浜）。ちなみに、スニール・ダット氏は、インドのスーパーヒーロー俳優、社会活動家、政治家である。彼は、藤井日達上人が設立した日蓮宗の日本山妙法寺というグループと共に、1988年に長崎・広島平和行進を行った。
- 5 Akira Hayashi「Contextualizing Gandhi's Hind Swaraj in Contemporary Japanese Art of Living: Some Reflections」Two days International E-Conference (Revisiting Gandhian Perspectives on Development: Reflections on Culture, Society and Politics) in Collaboration with Indian Council for Cultural Relations [ICCR], 4 September 2021, University of Delhi, India.

2021年9月3日から4日の2日間にわたってインドのデリー大学で行われたE-Conference国際会議 (Revisiting Gandhian Perspectives on Development: Reflections on Culture, Society and Politics 開発に関するガンディーの視点の再考：文化、社会、政治についての考察) は、2つのワーキング・セッションに分けて行われ、ワーキング・セッションⅠのテーマは、「Re-imaging Development: A Framework for Building Local Self Reliance 開発に対する考え方の再イメージ化：地域の自立を構築するためのフレームワーク」、ワーキング・セッションⅡのテーマは、「Art of Living: The Gandhian Way 生き方の術：ガンディー的な方法」であった。筆者は、ワーキング・セッションⅡで「Contextualizing Gandhi's Hind Swaraj in Contemporary Japanese Art of Living: Some Reflections 現代日本の生き方の術の中に見出されるガンディーのヒンド・スワラージ的な生き方」という題目で英語で発表した。

- 6 Akira Hayashi "Subhas Chandra Bose, Gandhi and Japan", in Shobana Nelasco (ed.), *Gandhi A Global Perspective*, Madurai, India: GTG Publications, 2020, pp.507-511.
- 7 Akira Hayashi "Fujii Guruji and Gandhi", in Shobana Nelasco (ed.), *ibid.*, pp.608-611.
- 8 Akira Hayashi "Japan and Hind Swaraj", in Terry Beitzel and Chandrakant Langare (eds.), *Rethinking Mahatma Gandhi*, Jaipur, India: Rawat Publications, 2021, pp.136-150.
- 9 Akira Hayashi 林明「The Influence of Gandhi's Hind Swaraj on Japan ガンディーの「ヒンド・スワラージ」思想の日本的展開」(英語を従、日本語を主として発表) Commemorative Events for the 75<sup>th</sup> Anniversary of Indian Independence and the 70<sup>th</sup> Anniversary of India-Japan Diplomatic Relations 153<sup>th</sup> Birth Anniversary of Mahatma Gandhi インド独立75周年及び印日国交樹立70周年記念事業 第153回マハートマー・ガンディー翁生誕日の集い、2022年10月2日、日印サルボダヤ交友会講堂(東京)。
- 10 筆者は、「ヒンド・スワラージ」について、林明「ガンディーのスワラージ構想」弘前大学人文学部教育研究プロジェクト事務局『国民国家の動揺と民族・宗教・言語 (2)―国際社会教育研究の一層の深化をめざして―』2000年、47-57ページ、及び、林明「ガンディーのスワラージ構想」弘前大学国際社会研究会『国民国家の動揺』水星舎、2001年、267-293ページ(後者の論文は前者の論文に加筆したもの)、林明「「心」を問題にした『ヒンド・スワラージ』とその今日の意義」(特集―『ヒンド・スワラージ』刊行100年を迎えて、の中の一論文)『サルボダヤ』第49巻第10・11合併号、2009年、16-22ページ、で書いたことがあるが、本論文では、それら3論文で書いた「ヒンド・スワラージ」について、本論文の趣旨に合うように大幅に加筆修正している。

なお、それら3論文では、「ヒンド・スワラージ」を理解するために、ガンディー思想の本質及び構造について次のように書いた。

即ち、ガンディー思想の本質は、人間の内面変革であり、そして、それに密接に結び付いた社会変革があり、それらが達成されることによって、自ずと政治的変革(ガンディーの生きた時代の文脈で言えば、イギリスからの独立)が実現されるというものである。

その構造を図形的に表現すれば、同心円の多重構造の一番内側に第一の内面変革があり、その外側に二番目の社会変革、そして更にその外側に三番目の政治的変革が来るといったように捉えることができる。

第一に内面変革が必要な理由は、社会は一人一人の人間から成り立っており、望ましい社会は、道徳的に十分発達した個人によってのみ維持されるからである。また、ガンディーは、人間は暴力によって変わるものではなく、非暴力によって相手の心に訴えることによってのみ変革できるとみていた。

第二に社会変革が必要な理由は、人間の望ましい内面変革を通じ、他者との理想的な人間関係が生まれるためには、それを可能にする社会環境を整えることが実践的な課題として必要になってくるからである。

そして、インドの本来の農村文明を、物質主義を特徴とする近代文明、都市文明に対し、精神性を重んじるものとして対置した上で、「村落復興」の思想が出て来ることになった。

- 11 森本達雄『人類の知的遺産 64 ガンジー』講談社、1981 年、145 ページ。
- 12 同上、148 ページ。
- 13 M. K. Gandhi, “Hind Swaraj”, op.cit., pp.19-20.
- 14 Ibid., pp.22-23.
- 15 Ibid., p.15.
- 16 Ibid., p.17.
- 17 Ibid., pp.26-28.
- 18 Ibid., pp.33-34.
- 19 Ibid., pp.35-36.
- 20 Ibid., p.54.
- 21 Ibid., p.58.
- 22 Ibid., pp.37-39.
- 23 M. K. Gandhi, *India of My Dreams*, Ahmedabad, 1947, pp.99-100.
- 24 M. K. Gandhi, *Constructive Programme Its Meaning and Place*, Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1945.
- 25 Ibid., p.5.
- 26 Ibid., p.3.
- 27 M. K. Gandhi, *India of My Dreams*, op.cit., pp.290-291.
- 28 塩田純『NHK スペシャル 家族の肖像 ガンディーを継いで 非暴力・不服従の系譜』NHK 出版、1998 年、25 ページ。
- 29 M. K. Gandhi, “Hind Swaraj”, op.cit., pp.39-53.を参照のこと。
- 30 Takeshi Ishida, “Japan’s Changing Image of Gandhi”, *Japanese Political Culture*, New Brunswick and London: Transaction Books, 1983, p.137.
- 31 Ibid., p.138, p.146.
- 32 Ibid., p.138.
- 33 Ibid., pp.139-140.
- 34 大形孝平『日本とインド』三省堂、1978 年、80-81 ページ。
- 35 矢野誠一『大正百話』文藝春秋、1998 年、3 ページ。
- 36 Saneatsu Mushanokoji and his comrades, “Atarashiki Mura no Seishin” (“The Spirit of New Village”), 1918. Translation by William G. Kroehler, 25 October 2014.から筆者が和訳した。
- 37 武者小路実篤『新しき村の生活』新潮社、1918 年、101-104 ページ。
- 38 Stanley Wolpert, “Gandhian Socialism”, *Encyclopedia of India*, 2006, vol.2, p.121.
- 39 野草社：80 年代編集部編『もうひとつの日本地図』野草社、1985 年。
- 40 同上、2-3 ページ。
- 41 同上、276-277 ページ。
- 42 塩田純、前掲書、23-25 ページ。
- 43 阿木幸男『非暴力トレーニング社会をひらくために』野草社、1984 年。
- 44 和光大学非暴力研究会「非暴力トレーニングの思想と歴史」2000 年度和光大学学生研究助成金論文、2001 年。
- 45 同上。
- 46 阿木幸男、前掲書、13-15 ページ。
- 47 同上、16 ページ。



- 48 同上、16-17 ページ。
- 49 同上、19-21 ページ。
- 50 同上、27-28 ページ。
- 51 浅井幹雄監修『ガンディー 魂の言葉』太田出版、2011 年。
- 52 同上、3-9 ページ。
- 53 同上、10-16 ページ。
- 54 同上、14 番目の言葉（同上の書では、18 ページに当たるところからガンディーの言葉 170 が順に取り上げられている。それぞれの言葉の上に何番目の言葉かが書かれているが、ページは書かれていない）。
- 55 同上、52 番目の言葉。
- 56 同上、89 番目の言葉。
- 57 同上、157 番目の言葉。
- 58 同上、165 番目の言葉。
- 59 ナーラーヤン・デサーイ著、栗原香織訳「もし今、ガンディーが生きていたら―遺志の体现者が送る大震災被害の日本人へのメッセージ―」『サルボダヤ』第 51 巻第 10 号、2011 年、12-18 ページ。
- 60 同上、14 ページ。
- 61 同上、15-16 ページ。
- 62 同上、17-18 ページ。
- 63 梅原猛「原発事故は「文明災」、復興を通じて新文明を築き世界の模範に」東洋経済オンライン、2011 年 4 月 5 日。<https://toyokeizai.net/articles/-/6624>
- 64 石原慎太郎は、同梅原猛の論説が書かれた当時、東京都知事であった。
- 65 梅原猛、前掲論説。
- 66 『アラヤシキの住人たち パンフレット』ボレボレタイムス社、2015 年、31 ページ。
- 67 同上、28 ページ。
- 68 同上、31 ページ。

ガンディー思想（「ヒンド・スワラージ」思想を含む）及びガンディーと日本の関係に関する筆者が関わっている（インターネット上の）動画資料、英文論文、英字新聞記事

#### ・筆者が作成した動画資料

ガンディーと日本の関係については、東大TVという動画サイトで視聴することができることを注 3 で触れた。歴史から見たガンディーの魅力、ガンディーの生涯と思想については、日印サルボダヤ交友会の動画サイトで視聴できる。ここで、それらすべてをまとめて記す。

Akira Hayashi 林明「Two freedom fighters for Independence in collaboration with Japan, Mahatma Gandhi and Fujii Guruji, Subhas Chandra Bose and Battle of Imphal 2 人のインド独立の闘士との日印協力：マハートマー・ガンディーと藤井グルジー、スバース・チャンドラ・ボースとインパール作戦」(英語及び日本語併用)、東大TV、2020年。

[https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture\\_5310/](https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture_5310/)

林明「ガンディー生誕日（10月2日）に寄せて 歴史から見たガンディーの魅力」（日本語）日印サルボダヤ交友会 YouTube、2021年。

<https://www.youtube.com/watch?v=gP8XhLXGwI0&t=13s>

林明「ガンディー殉難日（1月30日）に寄せて ガンディーの生涯—私たちへのメッセージ— 第一部 イギリス時代まで」（日本語）日印サルボダヤ交友会 YouTube、2022年。

<https://www.youtube.com/watch?v=aJsm5YP5Zhs>

林明「ガンディー殉難日（1月30日）に寄せて ガンディーの生涯—私たちへのメッセージ— 第二部 南アフリカ時代」（日本語）日印サルボダヤ交友会 YouTube、2022年。

この動画では、「ヒンド・スワラージ」についての話が出て来る。

<https://www.youtube.com/watch?v=bh5DGDDJiIU>

林明「ガンディー殉難日（1月30日）に寄せて ガンディーの生涯—私たちへのメッセージ— 第三部 インドでの活躍」（日本語）日印サルボダヤ交友会 YouTube、2022年。

<https://www.youtube.com/watch?v=cLWRf6DzFbc>

#### ・筆者と Thomas Weber 先生との共著英文論文 “Mahatma Gandhi: The Japanese Connection” の要約

<https://www.mkgandhi.org/articles/mahatma-gandhi-the-japanese-connection.php>

#### ・筆者に関する英字新聞記事

上記英文論文 “Mahatma Gandhi: The Japanese Connection” は、2017 年 9 月 13 日にインドのモディ首相と日本の安倍首相夫妻がインドのアーメダーバードにあるガンディー・アーシュラムを訪問した後、インドのガンディー・アーシュラムからの贈り物としてインド外務省を通じて安倍首相夫妻に送られた論文でもある。同英文論文は、インドの日本との外交上贈答品の価値がある論文であるとされ、日印関係の進展のために活用されたのである。

そのことを示す記事名、新聞名

“At Sabarmati Ashram, Japan PM Shinzo Abe, Akie Abe Offer Tributes To The Mahatma”, *Ahmedabad Mirror*, 14 September 2017.

<https://ahmedabadmirror.com/mahatma-enchants-the-abes/60503430.html>

また、平和の象徴としてインド政府の寄贈によるガンディーの胸像が広島に建てられた（2023 年 5 月にインドのモディ首相、広島市の松井市長らのご出席の下、除幕式が行われた）背景の歴史に関する評論の中で、上記英文論文 “Mahatma Gandhi: The Japanese Connection” が取り上げられている。

そのことを示す記事名、新聞名

Monika Chansoria, "Mahatma Gandhi: India's Greatest Symbol of Peace and His Japan Connections", *Japan Forward*, 29 February 2024.

<https://japan-forward.com/mahatma-gandhi-indias-greatest-symbol-of-peace-and-his-japan-connections/>